様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１４６１

研究課題名（和文）国際連盟の社会人道分野での活動から国際連合経済社会理事会への連続と断絶

研究課題名（英文）From the League of Nations' Social and Humanitarian Activities to the United Nations Economic and Social Council: Continuities and Discontinuities

研究代表者
後藤　春美（GOTO-SHIBATA, Harumi）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：００２８２４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国際連盟の社会人道面での活動と、国際連合経済社会理事会とは、人的、思想的な面も含めて継続していたのか、あるいは断絶していたのかを包括的に検討しようとしたものである。その成果をThe League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946 (2020) の第10章や、The League of Nations’ Technical Work in the Years of Growing Nationalism という英語論文（2023)に盛り込むことができた。今後は新しい共同研究で本課題の成果を発展させて行きたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　21世紀に入る頃から国内外において国際連盟の研究がさかんに行われ、連盟はアヘンや麻薬の取り締まり、保健といった活動も活発に行っていたことが明らかになってきた。連盟史を研究する側からは、国際連合期への継承が当然のように考えられるようになった一方、国際連合研究の側では連盟研究の進展には依然として目が向けられていなかった。
　本研究の学術的意義は、とくに経済社会面の活動において、国際連合と国際連盟との継続と断絶について検討を行ったことである。経済社会面は安全保障面に比べ軽視されることも多いが、世界平和の維持には同様に重要である。この点に目を向けたことは本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine comprehensively whether the social and humanitarian activities of the League of Nations and the works of the Economic and Social Council of the United Nations continued or whether there was a disconnection. I tried to consider this theme including the viewpoint of personnel and ideology. Some of the results are included in chapter 10 of The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946 (Palgrave Macmillan, 2020) and in a chapter entitled ‘The League of Nations' Technical Work in the Years of Growing Nationalism’ in East Asians in the League of Nations: Actors, Empires and Regions in Early Global Politics (Palgrave Macmillan, 2023) edited by C. R. Hughes and H. Shinohara. Due to the coronavirus pandemic, I could not sufficiently collect primary historical materials. However, fortunately, I will be a member of a new joint research project on a similar topic, so I would like to use the results of this project and further develop them.

研究分野：International History

キーワード：League of Nations　United Nations　internationalism

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

第一次世界大戦の反省に基づいて設立された国際連盟は、平和の維持に失敗したため、あまり研究されない状況が長く続いていた。しかし、21 世紀に入る頃から、国内外において国際連盟の研究がさかんに行われるようになった。

コロンビア大学教授 Susan Pedersen は 2007 年に出した、'Back to the League of Nations' (*The American Historical Review,* Vol. 112, No. 4) という論文の中で、国際連盟の活動の 3 分類を示していた。すなわち、安全保障(security)、主権(sovereignty)、社会問題(social questions)への 3 分類である。従来国際連盟が失敗したと考えられてきたのは、第一の安全保障分野での失敗によると言える。しかし、連盟は、委任統治、少数民族の権利保護という上記分類では「主権」に属する活動や、「社会問題」と分類される保健、女性や子供の権利保護、アヘンや麻薬の取り締まりといった活動も活発に行い、これらの活動ではむしろ成果を上げていたことが明らかになってきた。この点に関し、日本語では、本研究の代表者後藤春美が著した『アヘンとイギリス帝国――国際規制の高まり　1906-43 年』（山川出版社、2005 年）、同「中国のロシア人女性難民問題と国際連盟」木畑洋一・後藤春美編『帝国の長い影』（ミネルヴァ書房、2010 年）、同『国際主義との格闘――日本、国際連盟、イギリス帝国』（中公叢書、2016 年）、さらに、『国際連盟』（中公新書、2010 年）など篠原初枝の一連の研究、等松春夫『日本帝国と委任統治』（名古屋大学出版会、2011 年）、安田佳代『国際政治の中の国際保健事業』（ミネルヴァ書房、2014 年）などが出されていた。

このように国際連盟、とくにその社会問題に関する取り組みの成果が明らかになってくると、連盟史を研究する側からは、その国際連合期への継承が当然であるかのように考えられた。一方で、本研究に応募した 2017 年当時には、国際連合研究、国際機構研究の側では国際連盟研究の進展には依然としてそれほど目が向けられていなかった。国際連盟は国際機構の歴史上では確かに国際連合の前の機構ではあったが、連合は連盟とは切り離されて第二次世界大戦中の構想から新たに誕生したかのように考えられていることが多かった。

国際連合そのものの研究は、もちろん現在における関心から行われ、歴史的起源を探る必要があまりないのはその通りであろう。しかし実際には、国際連合は国際連盟とどの程度つながっていたのであろうか。とくに経済社会面の活動においてはどのような連続と断絶があったのだろうか。本研究はこのような「問い」から出発した。

２．研究の目的

本研究は、国際連盟の社会人道面での活動と、国際連合経済社会理事会のそれとは、人的、思想的な面も含めて継続していたのか、あるいは断絶していたのかを包括的に検討しようとした。中心的に取り上げるのは、研究代表者後藤春美のこれまでの研究との関連により、社会人道問題への対処における連盟から連合への継続性と断絶である。時期的には連盟の活動が終焉に向かっていた 1937 年から、第二次世界大戦を経て経済社会理事会が設立され活動を開始した 1946-47 年までを対象にしようとした。

３．研究の方法

研究の手法としては、ジュネーヴの国際連合図書館、および、その中にある国際連盟史料館、ニューヨークの国際連合史料館、及びイギリスの公文書館に所蔵された一次資料を中心に収集し検討するというマルチ・アーカイバルな方法を用いようと考えた。

４．研究成果

(1)2018 年から 2020 年の成果

2018 年 10 月から 2019 年 3 月までは、サバティカルをいただくことができ、University of Oxford の Nissan Institute of Japanese Studies で visiting fellow として研究を行った。この時の主要課題は、2005 年に上梓した『アヘンとイギリス帝国』、2010 年の「中国のロシア人女性難民問題と国際連盟」、2016 年の『国際主義との格闘』の内容を発展させ、英文で一書にまとめることであった。この書のうち第 10 章は、「国際連盟から国際連合への継続と断絶」という本研究のテーマと関連していたので、本研究課題による成果を一部取り込むよう努力した。この点については、2019 年 3 月 25 日に Princeton University での Global History Workshop-Roundtable で、Challenging the Imperial Order: The League of Nations and Social Questions

in East Asia と題する報告を行い、コメントをいただいた。

2019 年には、英文書籍の原稿をまとめる活動を中心に行い、2020 年に *The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946* という本を Palgrave Macmillan 社から出版することができた。この書を最終的に完成させるにあたっては、本研究課題による支援が不可欠であった。同時に、この書のもととなる日本語書籍に向けた研究においては、JP13610443、JP18520556、JP22530150 という科学研究費補助金による支援も受けた。記して感謝申し上げる。この本に関しては、以下の書評が出ている。

Review by Tomoko Akami, *The East Asian Journal of British History*, Vol. 8 (2021).
https://www.easbh.org/%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%AA%8C

Review by Thomas Gidney, *Connections: A Journal for Historians and Area Specialists* (2022).
www.connections.clio-online.net/index.php/publicationreview/id/reb-114028

Review by Quincy Cloet, Diplomatica, Vol. 4, Issue 2 (2022).
https://brill.com/view/journals/dipl/4/2/article-p310_008.xml

藤井崇史氏による書評、『史林』（史学・地理学・考古学）第 106 巻、第６号（2023 年 11 月）。

(2)2020 年から 2022 年――コロナ禍による研究方法の変化

上記のように快調に研究を開始したのであったが、英文書籍 *The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946* が出版された頃には、本研究課題に応募した際には全く予想していなかった事態に見舞われていた。それは、全世界がそうであった。すなわち、2020 年初頭に中国武漢に始まったコロナ禍が世界を襲い、海外に赴いて一次史料を収集するというマルチ・アーカイバル手法による研究は全く不可能となってしまったのである。本研究は、その後 3 年間は完全な方針の変化を余儀なくされた。

幸いにも、2021 年 5 月に第 71 回日本西洋史学会大会において記念講演を行う機会を与えられており、また偶然にも企画側からテーマとして「病気に関係すること」を要請されていた。さらに、当初は 2020 年 11 月に予定された第 119 回史学会大会シンポジウム「世界主義の諸様相ーーコスモポリタニズム・アジア主義・国際主義」にもパネリストとして登壇することになっていた。そのため、コロナ禍で移動が不可能であった 2020 年度には、時代を遡って 19 世紀初頭からの国際主義（internationalism）について、また 19 世紀から国際連盟の時期にかけての国際協力による病気のコントロールについて、広く 2 次文献を渉猟した。国際主義とは、国際連盟や国際連合の基盤となる思想である。コロナ前までは、文書館史料によって実際に何が起こったのかを突き止める研究を主としていたのだが、思想面に目を向ける機会を得たことで、これまでとは異なった観点から国際連盟や国際機関の歴史を考察することが可能になった。

2021 年の第 71 回日本西洋史学会大会においては 5 月 15 日に、「国際連盟の第三の機能――保健機関とアヘンの規制を中心に」と題して記念講演を行った（主催校は武蔵大学、オンラインによる開催）。「国際連盟の第三の機能」とは、まさに本課題で取り組む「国際連盟の社会人道面での活動」である。この講演では、19 世紀に遡って保健、アヘンの規制という二つの活動が芽生えた点を探り、それがどのようにして連盟の活動に取り込まれたか、連盟期にはどのような具体的活動が行われたかを詳述した。その上で、1930 年代に活動を発展的に見直す機運が生まれていたことを指摘し、それが国際連合経済社会理事会に繋がったことを展望した。

予定より 1 年遅れて 2021 年 11 月 13 日にオンラインで開催された第 119 回史学会シンポジウムにおいては「多分野における国際主義を取り込んだ国際連盟――その活動と問題点」という報告を行った。この報告では 18 世紀末の international という言葉の誕生に遡り、19 世紀における国際主義を概観し、その帝国主義との関連にもふれた。

2021 年から 2022 年にかけては、英語、日本語の二つの論文の執筆にも努力を傾注した。英語論文は、The League of Nations' Technical Work in the Years of Growing Nationalism というもので、Christopher R. Hughes and Hatsue Shinohara 編の *East Asians in the League of Nations: Actors, Empires and Regions in Early Global Politics* (Palgrave Macmillan, 2023) に掲載されている。1930 年代にナショナリズムが強まる中、日本と中華民国が国際連盟の社会経済面での活動をどのように利用しようとしたかを考察したものである。日本語論文は、『岩波講座世界歴史』第 20 巻（岩波書店、2022 年）に収録された「展望　世界大戦による国際秩序の変容と残存する帝国支配」である。2020 年度以降、19 世紀以来の国際主義の発展、およびその帝国主義との近接性に関し、思想的側面にも視野を広げて考察を深める努力を続けた成果が反映できたと考えている。経済社会人道面に限るものではないが、国際連盟から国際連合への発展、連続についてもふれることができた。

さらに、2020 年の *The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946* 出版がきっかけとなって、Centenary of the International Committee on Intellectual Cooperation of the League of Nations というハイブリッド形式の国際学会において、Session 6, Asia and Intellectual Cooperation: a Long-Distance Relationship の司会をオンラインで務めた（2022 年 5 月 12-13 日、対面開催の場所は United Nations Geneva）。

(3)2023 年における史料収集の再開と今後の展望

当初、本研究課題は 2018 年 4 月から 2022 年 3 月まで 4 年間の計画であったが、コロナ禍が終息しなかったため、研究期間を 2 回延長していただき、2024 年 3 月まで 6 年間の研究となった。

2023 年 4 月から 9 月までは、再び半年のサバティカルをいただき、London School of Economics and Political Science に visiting senior fellow として受け入れていただいた。コロナ禍を経て、4 年半ぶりにイギリスに赴き、中断していた史料収集を再開することができた。主としてダンバートン・オークス会議、サンフランシスコでの国際連合創設会議などの時期の史料を収集した。この史料の整理は現在も継続している。

コロナ禍により、研究方法の変更を余儀なくされたとは言え、19 世紀からの国際主義の思想的発展、帝国主義との近接性などに関しては、研究を深めることができた。しかし、研究に応募した頃に考えていた国際連合経済社会理事会への連続と断絶に関しては、不十分なままであることは否めない。ただし、幸いにも 2024 年から開始する科学研究費補助金基盤研究（B）「満州事変以後の国際連盟――戦後国際連合体制への継承と断絶」（研究代表者、篠原初枝）に参加できることになった。本研究での成果を新しい共同研究において発展させていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 後藤春美	４．巻 39
２．論文標題 日英同盟の時代と戦争に関する考え方の変化	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『近代日本研究』（慶応義塾福澤研究センター）	６．最初と最後の頁 65-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 後藤 春美	４．巻 13
２．論文標題 WINSTON CHURCHILL : 戦う人、語る人	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Humanities Center Booklet	６．最初と最後の頁 21～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003373	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後藤春美	４．巻 103-4
２．論文標題 書評「熊野直樹著『麻薬の世紀ードイツと東アジア　1898-1950』」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史林	６．最初と最後の頁 598-604
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/shirin_103_4_598	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 後藤春美	４．巻 270
２．論文標題 書評「大久保明著『大陸関与と離脱の狭間で』」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西洋史学	６．最初と最後の頁 121-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 後藤春美
２．発表標題 国際連盟の第三の機能ーー保健機関とアヘンの規制を中心に
３．学会等名 日本西洋史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 後藤春美
２．発表標題 多分野における国際主義を取り込んだ国際連盟ーーその活動と問題点
３．学会等名 史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Harumi Goto-Shibata（後藤春美）
２．発表標題 The Technical Issues of the League of Nations and the Empires in East Asia
３．学会等名 The League of Nations and East Asia（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Harumi Goto-Shibata
２．発表標題 Challenging the Imperial Order: The League of Nations and East Asia
３．学会等名 Global History Workshop-Roundtable, East Asian Studies Program, Princeton University（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、冨谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎、後藤春美（「展望」を担当）	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 298
3．書名 岩波講座世界歴史　20巻　二つの大戦と帝国主義Ⅰ 20世紀前半	

1．著者名 岡本 隆司、飯田 洋介、後藤 春美	4．発行年 2022年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 208
3．書名 国際平和を歴史的に考える	

1．著者名 C.R. Hughes, H. Shinohara, Harumi Goto-Shibata (‘The League of Nations’ Technical Work in the Years of Growing Nationalism’ を執筆)	4．発行年 2023年
2．出版社 Palgrave Macmillan	5．総ページ数 365
3．書名 East Asians in the League of Nations: Actors, Empires and Regions in Early Global Politics	

1．著者名 後藤春美	4．発行年 2022年
2．出版社 放送大学教育振興会	5．総ページ数 16
3．書名 近現代ヨーロッパの歴史　第７章	

１．著者名 Harumi Goto-Shibata	４．発行年 2020年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 307
３．書名 The League of Nations and the East Asian Imperial Order, 1920-1946	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関